

むかし、鳥山小町こまちと言われた、料亭りやうていひのきやの一人娘「すが」は、大久保家さんまんごく三方石の御城内ごじょうないに住む琴姫様ことひめさまに仕えておりました。

その頃、家老かろうの佐伯左衛門さえもんは、城主さだのかみ佐渡守さだのりの留守をよいことに、私腹しふくを肥やそうと、密貿易みつぼうえきを企たくらんでいました。そのことが、江戸幕府えどばくふにも知られ、隠密おんみつが鳥山城下とりやまじょうに入ってきたのです。

小田原こたはらの御本家ごほんけでも、動静どうせいを探さぐらせようと、植原うえはらい一刀斎いっとうさいという剣客けんきやくを鳥山つかに遣わしたのでした。琴姫も、このことを心配しながら、父佐渡守さだのりの留守を守っていました。

ある夜、姫はひのきやで待っている植原うえはらい一刀斎いっとうさいに、大事な密書みつしよを「すが」に届けるよに命じたのです。「すが」は、夜更よふけけに一人で城を抜ぬけ出し、用心深く山を下おりりました。

家老かろうの佐伯左衛門さえもんは、姫を監視かんししたり、城の内外に見張りをつけていたのです。その夜も倅源せがれげんのすけ之助のすけに見張まらせていたのです。そこへ「すが」が下りてきたので、見つかつて

しまいました。

源之助げんのすけは、

「誰だ！どこへ行くのだ！お前の持っているものを渡せ…」

と、どなりながら「すが」に、切りかかったのです。

「すが」は肩からバツサリ切られてしまいます。しかし、密書みつしよは絶対に離しませんでした。源之助が無理にもぎ取ろうとすると、その文箱に真っ黒い蛇が巻き付いている。

密書を取ろうとする源之助の手にその蛇がぬるぬると渡ってきて、その腕に突然かみついた。かまれた源之助は、痛みに怯ひるんで倒たおれ、それと同時に「すが」の息も絶たえたのでした。

集まってきた家来たちに密書は奪われ、「佐伯左衛門の手に渡ってしまうのでした。

城中の琴姫は「すが」の帰りを今か、今かと待ちわびていました。姫が「うとうと」とした時、血まみれの青白い顔をした「すが」の姿が姫の前に現れ、思わず姫は「すが！」

と叫んだ。その姿が消えた部屋の隅すみに、小さな黒い蛇が、姫を見上げておりました。

それからというもの、姫のまわりに、いつも一匹ひきの烏蛇からすへびが見え隠れしては、姫に何か

起こると、必ず姫は、その蛇に助けられました。「すが」の化身である烏蛇に守られてい
る琴姫様を誰いとうともなく「蛇姫様」と呼ぶようになりました。

姫は、植原一刀齋や「すが」の兄千太郎たちの命がけの助けにより、悪家老佐伯左衛
門一味を亡ぼし、大久保家の安泰を成し遂げることが出来ました。

その後、大久保家は、明治四年の廃藩置県に至るまで、ずっと烏山城主として、この
地を治めました。

おしまい

参考資料 野州からす山の民話第二集 (烏山観光協会)